

身体アートから社会を見つめる

～日本のペルー人物語を創ってみる～

ワークショップ報告書

これがわたしたち

**Así
somos
nosotros**

身体を動かしてみても、初めてわかること

企画・制作 吉川 恵美子

上智大学グローバル・コンサーン研究所の事業の一環として2016年から連続して「身体アートから社会を見つめる」という企画を実施してきました。中南米から上智を訪れてくれたアーティストたちは多くの感動的な言葉を残していましたが、その中でいちばん私の心に残ったのは、「アートは、心に心を伝える」という言葉でした。人が言語を使って組み立てる理論や理屈や情報は他者の「頭」に届きます。相手は「なーるほど。そういうことなんだ！」と納得するかも知れませんが、なかなか心までは届きません。その点、アートは、理屈を伴わなくても「なんだかじーんと来ちゃった」りするのです。

アートの魅力は、そこに「それ」があることです。音楽でも絵画でも「それ」が、理屈を語らずに、そこにあります。今回の「日本のペルー人物語」では演劇の手法が用いられましたが、演劇の場合の「それ」は身体です。人ひとりの身体はそこにあるだけで、その特長や表情から多くのことを伝えてきますし、生身の存在感があります。

今回、7人の上智生がこの企画に参加してくれました。この7人は、同じ場所で同じ空気を吸いながら「日本にいる日系ペルーの人たちってどんな人？」の探求の旅に出かけました。ペルーの人たちを実際に訪ね、相手の体温を感じながら話を聞きました。メディアや研究者を介さず、自分の目で相手の表情を捉え、自分の耳で相手の話に聞き入りました。そこで得た情報や知識を、仲間と意見交換しながら、ペーパーやパワポではなく自分の身体でどう表現するのかを模索しました。身体で表現しようとすると思いがけない世界が見えてくるのを体験しました。

学部、学科、学年を超えて集まった7人の学生は、「他者のために生きる」という大学のモットーをなんの銜もなく自分の生き方に取り込んでいる意識の高い学生たちでした。そんな学生たちが遂行した身体表現の冒険の旅の記録が本冊子です。すずきこーた先生は「進行役」の気配を消しながら見事に進行させていただきました。企画アシスタントの藤浪京さんはワークショップのほぼ準メンバーとして全行程を伴走してくれました。お二人にお礼申し上げます。

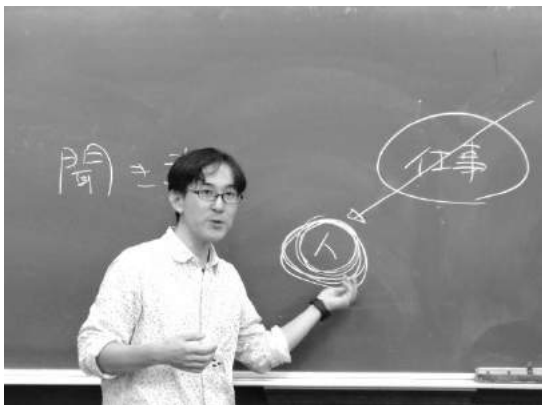
上智大学外国語学部イスパニア語学科教授。グローバル・コンサーン研究所所員。専門はラテンアメリカ現代演劇。研究所所員として、2016年度から中南米アーティストの参加を得た企画を立案・運営してきた、ピオレタ・ルナ・ワークショップ(2015年度)、ピオレタ・ルナ・パフォーマンス公演(2016年度)、アナ・コレア・パフォーマンス公演(2017年度)を経て、今年度は学生参加型のワークショップを実施した。「人権をめぐるラテンアメリカ演劇委員会」主宰。

受け止めることと伝えること ～多文化共生と演劇～

進行役 すずき こーた

「グローバル化と言っても、留学など海外に行くことだけではなく、日本に住んでいる外国人の人たちにもっと目を向けるべきです」という、吉川恵美子先生のお話から今回の企画は始まりました。私は、日本に住む多くの外国にルーツのある人たちと一緒に演劇をつくってきました。協働作業しながら演劇をつくることで、特にアジアやラテンアメリカから日本に労働力として来ている社会的弱者である人たちと、理解しあえる関係がつけられてきたと感じています。「良い作品を創る」ことにおいては、国籍は関係ありません。対等な人間関係を作り得るのが、演劇の大きな力だと思います。実はこれは、障がいを持った方たちと演劇をつくるときにも感じることです。

入管法が改正され、今後多くの外国人が日本で暮らすことが想像されます。単なる労働力として見ないのももちろん、困っている時に助けてあげるだけではなく、本当の意味で共生することが求められています。経済面・外交面では違った捉え方をしているかもしれませんが、私たち市民レベルでは少なくとも互いを尊重しあいながら共生する道を探っていくべきだと、私は考えます。当初はペルーの方たちと一緒に作る案もありましたが、時間的な問題などで今回は取材させてもらうという形で進みました。



まず学生の皆さんには、日本に住む私の友人たちにインタビューしてもらい、それを「聞き書き」という形にまとめてもらいました。聞き書きは、話し手が一人で話し続けているように書き起こした文章です。通訳などが入っている今回のものは、厳密には聞き書きとは言えないかもしれません。それでも、学生の皆さんは話してくれた人たちの想いをしっかりと受け止めていました。

インタビューの後、大きく分けて3つの場面をつくってもらいました。

- ・余計な動きは入れずに、聞き書きをただ声に出して読む
- ・聞き書きを読む人の横で、読まれた文章の特徴的な部分のストップモーションを身体でつくる
- ・聞き書きは読まずに、会話で再現する

なぜこのような場面をつくったかという、取材してきたことが、伝わりやすい方法だと考えたからです。もちろん他にも方法は沢山ありますが、演劇経験の少ない人でも手順を踏めばつくることができる演劇の方法を選択しました。

「日本に来て行った最初の仕事は、日産自動車会社でのパネルづくりであった。パネルの骨組みをつくり、一からきれいに作業することが求められた。一番簡単なのは穴を塞ぐことだったんだが、逆にこれ（布張り）が一番難しい。なんてたって上張りをセットするのが大変。皺ひとつあっちゃダメになっちゃうからね。ダメにしたいなんて思いながらやる人なんていないもんなんだけど、それでもなかなか思うようにいかないもんだから、うまく行きますようにって祈りながら貼り付けるのを見守ってたもんだよ。」

という書き起こしがありました。「日本での最初の仕事は自動車会社で、大変苦労しました」とまとめることもできますが、具体的な内容を書き起こすことによって、状況が想像できたり、話してくれた人の思いがより明確に表現されます。そして、そのことを変に加工せず、言葉に声を載せて、そのまま観ている人に届ける、そのような演劇をつくりました。会話劇にしたり、不自然な動きをつけるよりも、ストレートで、伝えたいことが力強く伝わったと思います。

一方で、会話する、つまり状況を再現することで伝わることもあります。実際には経験していないので想像することからつくるわけですが、想像するからこそ、話してくれた本人の気持ちや状況がはっきりと伝わるということもあります。例えば、会社に有休をもらうという当然の権利を行使しようとした時の場面をつくったときには、会社から断られた時の状況（会社側の考えや気持ち）や、断られた本人の気持ち、後に労働組合に行こうと決意したことなどが、関係性から浮き上がってきました。

「聞き書き」は、特に気持ちを伝えている時には、シンプルに読むだけで多くのことを伝えられます。しかし、それだけでは飽きてしまうので、視覚的に補完してあげると、状況や想いがより明確に伝わる場合があります。しかし、会話の再現のように、いわゆる演劇のような形にしてしまうと、状況がどんどん進んでいくので、観ている人がまばたきをした瞬間には次の場面になってしまった、結果、分からなくなってしまった、みたいなこともよくあります。この「聞き書きとストップモーション」というのは、ただ読むだけと会話劇の間をとった、しかし他の二つとは違うとても有効な方法だと私は考えます。



学生みなさんに最初に、この三つの方法で演劇の場面をつくることを伝え、考えてもらいました。自分たちで書いた聞き書きのどの部分（エピソード）が、どの表現に最適かを直感的に判断し演劇をつくっていきましたが、それぞれの方法を活かした場面を選んでいて、学生の皆さんのセンスの良さは素晴らしいかったです。

今回話をしてくれたペルー人の方たちは、1980年代末、バブルの頃にやって来た、第一世代の方たちです。しかし現在は、第一世代の人たちの子どもや孫たちが、多く日本に住んでいます。そこには、第一世代の人たちにはなかった問題が現れているとも言われています。例えば、親の母国語を完璧には話せず、かといって日本語も完璧ではなく、自分の気持ちをうまく表現することができない子どもが少なくありません。そのような新しい問題に、どのように対応していくか、それは第二・第三世代の人たちと、今日本に住んでいる私たち日本人が共に考えなくてはならない問題です。はじめて会うペルーの人たちに、自分たちが生まれる以前の話聞き、演劇をつくり、共感する。閉鎖的になるのではなく、共生していく道を探る、そのような可能性が、今回の学生との演劇づくりで見えたような気がします。



世田谷パブリックシアターでのワークショップ・ファシリテーター（1998-）。日本人と日系ペルー人との演劇グループ Cerro Huachipa 設立（2003-）、インドネシア・アチェ州にて紛争被害にあった子どもたちとのワークショップ・ファシリテーター（主催：国際交流基金 2007・2010）。上智大学「演劇入門」講師（2011-12）、「演劇から見える世界と人間」講師（2014-15）、神奈川県立大師高等学校非常勤講師（演劇表現担当 2011-17）、東京造形大学非常勤講師（映像特論担当 2015-16）、目白大学非常勤講師（演劇知論担当 2016-）。

ワークショップの流れ

○11月15日(木) 18:45-20:15

1. 自己紹介(ワークショップで呼んでもらいたい名前、学科、学年)
2. お互いを知るゲーム
 - ①椅子取り(僕・私と一緒に○○な人)
 - ②二人組で1・2・3のカウント(手・2・3/手・2・足/手・ひざ・足)
 - ③二人組で似顔絵描き(30秒相手の顔を見ながら紙を見ないで描く)
→他己紹介(参加理由、自由な質問)
 - ④Go&Stop(身体を動かす:Goで止まりStopで動く)
→指示された内容でポーズをとる(痛い・100円が落ちていたなど)
3. グループごとに物語の一場面を自由に選定し、身体の動きのみで表現する(ストップモーション)
 - ①『桃太郎』と『三匹の子豚』
 - ②畳販売者と弁当店の聞き書き(『日本人の仕事』鎌田慧著、平凡社、1986年。より抜粋)



○11月18日(日) 15:00-17:00

蒲田教会にて池田セサルさん、宮城モニカさん、佐伯キケさんへのインタビュー

1. 全員で自己紹介
2. 3つのグループに分かれて詳しく話を聞く(模造紙に年表を書き込む)
3. 宿題:各自次回までに聞き書きを書いてくる



○11月22日(火) 18:45-20:15

1. 全体でインタビューの感想を共有
2. インタビュー時の3グループに分かれて各自の聞き書きを読み合う
3. グループごとに作品創作の準備
 - 1) 聞き書きから5~10行分を選定し、タブロー(ストップモーション)を創る
 - ①自分のグループのタブローを他のグループに教えて真似をしてもらう
 - ②他グループがタブローを演じた後、聞き書きの選定箇所を読み上げて何を表現したのかを説明する
 - 2) 会話の場面を創る
 - ①ストップモーションで創ったものとは違う場面を選ぶ
 - ②聞き書きそのものを読み上げるのではなく、会話による場面の描写をする
 - 3) 会話の場面の聞き書きを読む
 - ①グループ全員のものを織り交ぜても、1人のものでも良い
 - ②身体の動き(歩きながら・身振り手振りなど)を付けながら聞き書きを読む
4. 宿題:次回までに他にも作品に取り入れたい場面や他グループに協力してもらいたい場面を考えてくる



○11月29日(火) 18:45-20:15

11月22日に創ったタブローを繋ぎ合わせる(2グループに分かれて話し合い)

Aグループ案

- ①モニカ：来日の場面
- ②セサル：姉との電話での会話の場面
- ③キケ：自問自答の場面
- ④セサル：パネル組み立て+食器洗いの場面
- ⑤モニカ：有休取得を拒否される場面
- ⑥キケ：働きながらジャーナリズムの通信教育受講の場面
- ⑦モニカ：労働組合のデモの場面
- ⑧キケ：3.11とWEB雑誌KANTŌの立ち上げの場面

Bグループ案

- ①セサル：姉との電話での会話の場面
- ②キケ：自問自答の場面
- ③モニカ：来日の場面
- ④セサル：パネル組み立て+食器洗いの場面
- ⑤キケ：働きながらジャーナリズムの通信教育受講の場面
- ⑥モニカ：労働組合のデモの場面
- ⑦キケ：3.11とWEB雑誌KANTŌの立ち上げの場面



決定

- ①モニカ：来日の場面
- ②セサル：姉との電話での会話の場面
- ③キケ：自問自答の場面
- ④セサル：パネル組み立て+食器洗いの場面
- ⑤キケ：働きながらジャーナリズムの通信教育受講の場面
- ⑥モニカ：労働組合のデモの場面
- ⑦キケ：3.11とWEB雑誌KANTŌの立ち上げの場面
- ⑧モニカ：現在の仕事



○12月6日(火) 18:00-20:15 (発表会)

1. 練習 (18:00-19:15)
2. "Así somos nosotros (『これが私たち』)"上演 (19:30-19:45)
3. 観客からの質疑応答・コメント/ワークショップ参加学生・コーディネーター・主催者からのコメント (19:45-20:15)

池田セサルさんのお話の聞き書き

書き手 さとばち

たーしか、8月、30日かな。

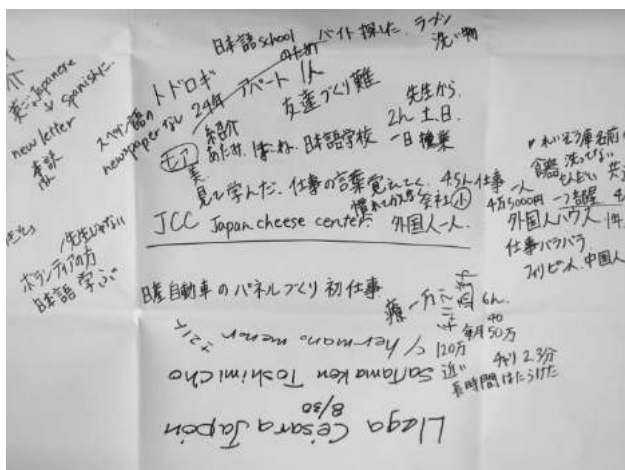
埼玉に住んでたんだよ。東松山市と鴻巣の近く。ちょうどあの中間地点に、えっと、としみ町っていうところがあってね。ずっと田んぼがあるようなところさ。そこが私の日本の故郷。初めて住んだ、日本だからね。

私は飛行機で団体で来たんだけど、73人くらいかな。ただ全員が全員そこに行ったわけじゃないんだ。えーっと多分21、うん、21人だかな。弟も一緒だったよ。

会社がとにかく大きくてさ。日産のパネルを作ったわけよ。最初の仕事として。ライン作業をするわけだが、例えばそのパネルは元々自動車のメーターやらラジオやらはめるための穴が開いてるわけさ。それをテープで塞いで、こう、上張りをはっつける機械に持ってくと。骨組みはプラスチックでできてて、でもそれじゃあ見栄えしてもんがよくないから張るんだけどね。機械の下に上張りの布を敷いて、骨組みを上に乗せて閉じるんだ。

ただそのままだと固いパネルになっちゃうだろう？でっかい注射みたいな筒に液体が入ってるんだが、この液体はスポンジ状に変化する性質があってね、これが布とプラスチックの間に入ることでふわふわで手触りのいいパネルになるんだ。

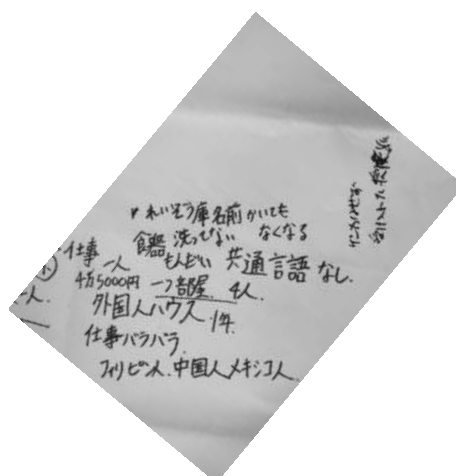
一番簡単なのは穴を塞ぐことだったんだが、逆にこれ（布張り）が一番難しい。なんてたって上張りをセットするのが大変。皺ひとつあっちゃダメになっちゃうからね。ダメにしたいなんて思いながらやる人なんていないもんなんだけど、それでもなかなか思うようにいかないもんだから、うまく行きますようにって祈りながら張り付けるのを見守ってたもんよ。



日本語は最初は公民館でのボランティアの人が教えてくれるところで教わったよ。ちゃんとした先生じゃないからちょっとわかりにくかったけど。でも皆友達で楽しかったね。教科書、最初のは『日本語の基礎』って名前だったな。そう、それで Japan Cheese Center で働いてたわけなんだけど、唯一、外国人は私だけだったんだ。日本語はわかんないし、通訳できる人もいない。やる仕事は簡単だったから、教えてくれる人のやるのを見てればできていたけど。日本語も、だんだんだんだん毎日の仕事に使う日本語は覚えていったよ。

そのあと、ほら、MOA っていうあるじゃない、Mokichi Okada Association、熱海にも美術館あるところ。例えば品川だと外国人向けに日本語学校開くこともしてるわけ。土日とか一日中授業やってはいなくて、1コマ2時間ずつくらいだね。ちょっと高いんだけど、プロの人だからね。

前の会社は結構給料もらえたんだけど、ここは当時小さくてね。一日6時間とか残業は多かったけど40万とか50万月もらえてたのが、そうじゃなくなっちゃって。寮も月1万だったのが、いろんな国籍の外国人向けの共同ハウスに住むようになったのさ。イラン人もいたよ。小さな部屋に4つもベッドがあるのに一人当たり45000円も払ったよ。言葉も違うし日本語も話せない、辛うじて英語で話せたとしても、イラン人はそれすらも話さない。まともにコミュニケーションなんてできなかったよ。時々けんかもあるわけ、仕事から帰ってみれば。例えば共同のキッチンで使ったものを洗わなかったとか、自分の食材を勝手に使われたとかね。私はけんかを見はしたけど、自分がすることはなかったよ。まだきれいなやつ使ったり、そうでなければ黙って洗ってたりね。こんな感じだけど、面白い。皆全然違う考え方で。ストレスには感じなかったね。



書き手 ゆい

経済的、文化的な面で大変なこともあるが私は今日本での生活に満足している。なぜなら、日本に来ることが小さいころからの夢であったから。

「日本に行って、建築の仕事をしたい。」それは、私と友達二人の小さいころからの夢であった。ペルーで内戦が勃発し、私は友達に誘われてベネズエラへ移った。そこでは、自分のやりたかった建築家の仕事をしていた。しかし、姉から二週間後に日本に行く団体の話を聞いた。次のチャンスはいつになるかわからないという話だったので、いつか行くことを夢見ている日本に渡ることを決意した。

日本に来て行った最初の仕事は、日産自動車会社でのパネルづくりであった。パネルの骨組を作り、一からきれいに作業をすることが求められた。住んでいた寮は仕事場に近くて、長時間働いて、たくさん稼ぐことができた。一緒に働いていた人たちは同じく外国からきている人達が多く、支えであった。仕事をしながら、日本語はボランティアの方々から教わった。この時、自動車会社との仲介会社がボーナスを渡してくれなかったり、二年に一回家に帰れるという契約は不況の影響でなくなったり、不正がいくつか起きていた。

次に就いた仕事場は、Japan Cheese Center であった。ここで私はたった一人の外国人労働者として働いた。日本語をまだ話せない私は、チーズのパッケージをする作業など全て見て学んだ。引っ越した先は、世界中から日本に来た外国人が集まって一緒に住む家。そこにいる人はみな仕事がバラバラで、共通言語も、文化も違う。利用された食器が洗われてないまま置いてあり、使う食器がないときや、冷蔵庫に自分の名前を書いていれた食べ物なくなることもあるが、私はこれらを受け入れ、喧嘩を始めようとは思わない。自ら彼らの食器を洗った。仕事場から家まで距離は遠く、長時間働くことから、給料は少ない。お金を日本から家族に送っていたが、そうすることが困難になった。前は、高い費用を払いながらも、Mokichi Okada Association という日本語学校に通い、日本語を学んだ。また、お金を稼ぐためモアの紹介を受けたバイトも始めた。ラーメン屋とかいろんなところで働いたが、スペイン語と英語を話せる能力を生かした翻訳の仕事にたどり着いた。これによって、モアの日本語授業料を払わなくてよくなった。今も日本語を勉強しながら、この JCC でのお仕事を続けている。この仕事には慣れて、違う仕事を始めることは難しい。大変なこともあるが、うれしいこともある。私は今の生活に満足している。なぜなら今私は日本で自分の小さい頃からの夢を実現しているから。

宮城モ二カさんのお話の聞き書き

書き手 しおり

今から約 30 年前の 1988 年、生まれ育ったペルーから遠く離れた日本という国に仕事を求め、やってきた。地元の日系の人々がとっている新聞で日本には沢山の仕事があると目にしたのがきっかけ。今でも、ご飯を食べているときには故郷のペルーを思い出す。故郷を懐かしく思う時もあるけれど、日本の生活の中でも数えきれないほどの思い出があるなあ。

日本に来た 1998 年から二年後の 1990 年、私は沖縄に住んでいたの。そこではホームステイをしていたんだけど、本当に楽しい生活だった。ホームステイを通して日本語も前よりわかるようになったし、何よりも沖縄特有の文化や人の温かさを感じることができたわ。沖縄での暮らしの後は 23 年間車の工場で働いた。一緒に働いていた仲間は、ブラジル、フィリピン、ラテン系の人々、韓国から日本に来ている人など様々だったわ。決して収入がいいとは言えないけれど、自分と同じような境遇の仲間がいたから頑張ることができた。だけど、上司はとてもいい人とは言えなかったわ。私が初めて有休の存在を知ったのは、1990 年。故郷のペルーに帰るために 25 日間の有休が欲しいと上司に頼んだら、私の上司はそれを許してはくれなかったの。最終的に私はその工場では働くことはできなくなった。仕事が早く終わったり、無くなった場合には給料の 65%をもらえるはずなのに、私たちはそれをもらうことができなかったの。それがきっかけで、私は自分自身、そして他の仲間の権利を求めて立ち上がることに決めた。労働組合の神奈川シティユニオンに入り、私たち日系人労働者の権利を求めて戦う決意をした。時には川崎駅で一日中デモに参加することもあった。努力の甲斐があっただけ、23 年間働いた自動車工場から退職金として 200 万くらいのお金を受け取ることができた。そのお金はすべて私が受け取るわけではなく、そのうちの何割かは労働組合に払い、今後の活動の資金に使ってもらうことになってる。自分が権利を獲得したらそれで終わりではない。私の権利のために戦ってくれた労働組合の他の仲間のために今度は戦わないといけいないの。「自分のためじゃない、みんなのため」だからね。

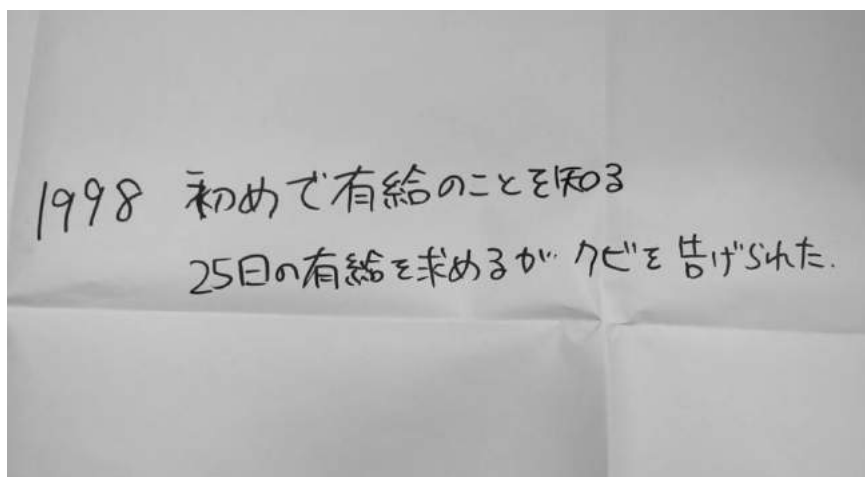
今私は介護の仕事をしているのよ。介護の資格を取るの簡単ではなかったけれど、11 ヶ月間頑張って勉強をして 4 年前から無事に福祉施設で働くことができるようになったわ。自動車工場ではひたすら部品と向き合う毎日だったけれど、介護の仕事は人と人との関わりがとっても大事。人との触れ合いを感じることができるこの介護の仕事は、昔の工場で働くことに比べてとても気に入っているのよ。自分の権利を求めてあの時に戦ったことは間違っていなかったんだなと感じているわ。今もこれからも私は日本で生きていくと思う。だからこそ、自分や仲間の権利のためにこれからも立ち上がるべき時には協力したいと思っているの。

書き手 なつみん

モニカ Monika さん。ペルーのヴィクトリア出身。15歳まで学校に通い、23歳のときペルーの不景気と「日本に仕事がある」という知らせを機に、1988年単身で来日。はじめ、沖縄の伯父を頼り生活。神奈川の工場へと仕事場を移り、その後、4年前から介護士として働いている。

話すときはスペイン語で話しますよ。日本語はあまり話せないからね。88年に日本に来てもう30年くらい。最初は工場で働いていました。ペルーを懐かしく思ったりは、あまりないですね。私の家族は日本にいますし、ペルーにいた家族もみんなアメリカに行きました。だから、もう家族はペルーにはいません。

日系人向けの研修ビザが取れるようになって、日本へ団体で行く人達もいましたけど、私は一人で来たんです。一人で日本にやってきて、だから家族には心配されました。沖縄の伯父を頼って、はじめて来た日本は沖縄でした。そこではスペイン語が通じなかったので、日本語はそこで身に付けました。沖縄はいいところでしたよ。私は沖縄が好きです。けれど、そのうち神奈川の工場で働き始めました。長い間、有休という制度がある事すら知らなくて、それを知ったのはもう何年も経ったあとでした。それで、有休を25日くらいとって、日本に来てから初めてペルーに帰ろうかと思ったんですけど、工場の方は「帰ってきたときには、もう仕事はなくなっている」って。工場では私みたいに外国から来た人がたくさんいて、給料を払ってくれなかったり、差別があったりしました。でも、有休の話を労働組合の人にしたら「それはおかしい。帰ってきたときに仕事がなくなっていたら言ってくれ、そんなことはないようにするから」と、私はペルーに帰ることができました。



※有給→正しくは有休

それから私は、神奈川シティユニオンという労働組合に入って活動を行いました。会費を払ったり、一日中デモに参加したり、自分のことだけでなく、他の人のデモにも参加して忙しかったです。労働組合には日系だけでなく、韓国やフィリピンの人も多く、日本人もたくさんいました。特に、韓国人のマリアさんという人は、韓国語と日本語を通訳したり、行動力があつたりと、ヒーローみたいでした。けれど、バブルが崩壊した 1990 年くらいに日本の法律が変わって、一緒に働いていた韓国人やフィリピン人たちは国に返されていきました。

私は 23 年間働いていた工場をやめ、JICE という日系がただで日本語を勉強できる学校へ行きました。退職金は 200 万だったんですけど、その 18%が労働組合にとられました。JICE では日本語を学んだあと、選択として介護の勉強をすることもできました。工場の仕事はもう嫌だったので、私は介護の勉強をして介護士になりました。今までは工場で機械を扱っていたけど、介護で相手をするのは人です。そこで日本語を話すようになって、デイサービスでレクリエーションをやったりと楽しかったです。だけど、アルツハイマー、認知症や体の動かせない人の相手をするときはとても大変ですね。私は介護士になって四年になります。今、同じ場所で働いている介護士で、ペルー人は私だけです。



佐伯キケさんのお話の聞き書き

書き手 なおばか

2012年から「KANTŌ」というオンラインニュース雑誌を作ることにしたんだ。日系ペルー人とカペルー人向けに年に4回発行している。色んな文化を融合させたかった。20人のスタッフで、僕は編集長を務めているよ。きっかけは2011年の東日本大震災だった。原発を巡る真偽が問われる情報が横行する中で、僕ら外国人は情報がなくて困っていた。そこで自分たちが見たもので情報を発信し、ペルー人の人々の不安を解消して、生活を支えたかった。だから、実際に福島に4日間足を運んだこともあるね。

僕が元々ジャーナリズムに興味を持ったキッカケは、1988年、フォトジャーナリズムを学び始めてからだ。23歳、ペルー国内の紛争や経済危機によって、カメラマンになる夢を諦めて、消防士として働くことになったんだ。間近でterrorismoや暴動をみたんだ。それらを写真に収めたいという思いが増したんだ。本当はパリカバルセロナでフォトグラフィーを学び続けたかったんだけど、お金がなくて諦めたんだ。だから、1998年にお金を少し貯めるために日本に来たんだよ。僕のお父さんはペルー人でお母さんは日本人、日系1世なんだ。

日本では自動車工場で働いていたよ。2000年代は外国人排斥の傾向が高まって辛いこともあったね。それから、2000年にパナマの大学のジャーナリズムコースの通信教育を受けたんだ。インターネットで授業をうけたり、教材が国際郵便で送られてくることもあることもあったよ。

2008年にスペインで一年間デジタルジャーナリズムを学んで日本に帰ってきたんだ。僕の人生において、「KANTŌ」を作り始めたことが一番の大きなできごとかな。今後は、「KANTŌ」をもっといろんな人とコラボレーションしてより多くの人に読んでもらいたいな。



書き手 りかこ

私の名前は Enrique です。でも、みんなからは Kike って呼ばれています。母が日本人で、父はペルー人。前の妻との間には息子と娘が 1 人ずついます。今は自動車部品の工場で働いてます。それと、Revista Digital の編集長もしてる。KANTŌ っていうものなんだけど。2012 年に自分で作りました。今は主に Facebook から発信しています。

日本に来たのは 1989 年。来る前はペルーで消防士をしていたよ。本当はパリカゾルセロナに行きたかったんだけど。コラムの書き方とか Fotografía を勉強するために。でも、その前にお金を貯めようと思って日本に来ました。なんで Fotografía を勉強したかったかって、当時ペルーでは経済危機のせいでテロがよく起こっていて、、、それを写真に残したかったからですね。

日本に来てからはずっと自動車部品の工場で働いています。当時は差別もあったりして、なんというか、、、嫌だと思ふこともあった。今はそんなことはないけど、もしかしたらそう(差別を受けていると)感じてる人もいるかもしれない。

部品工場ですっと働いてはいるんだけど、やっぱり Fotografía とか Fotoperiodismo について勉強したい気持ちがあって、2000 年にパナマの大学の Periodismo コースを受けていたんだ。その時は茨城にいながらオンラインでコースを受けていたんだけど、オンライン教材がまだ発達している時代でもなかったから、国際郵便で教材が送られてきたりもしていたよ。

娘は今大学生で、息子は中学 3 年生だから、彼が生まれたのもちょうどこのくらいの時期でしたね。

それで、2008 年にはスペインの大学で 1 年間 Periodismo Digital について学びました。

KANTŌ を作ろうと思ったきっかけは、2011 年の大震災のときなんだ。ずっと働いている部品工場が有休消化をしなきゃならなくて、40 日間休んだんだ。この時に、日本の新聞の記者でスペイン語が話せる知り合いができて、彼に震災に関する本当の情報を教えてもらえるまで、正しい情報を知らなくてさ。ほら、日本政府が色々嘘を言っていたでしょ。私たちのコミュニティは混乱していたと思う。それまでにも、Mercado Latino 紙とかには記事を書いたりもしていたんだけど。この時に、情報の重要さを知ったんだ。だから、2012 年に 20 人くらいの仲間と一緒に KANTŌ を作りました。Revista de artes なんだけど、3 か月に 1 回、文化について書いて発行しているよ。色々な文化を融合させたくて。今後はこれをもっと成長させられればと思っています。

発表会（書き起こし）

これは発表会時に採録した音声および映像をもとに記録担当の藤浪京が書き起こした上演の流れです。発表会に至るまでの間、出演者の学生たちは自分が書いた「聞き書き」と、こーた先生と学生のみんで決めた場面転換のメモだけを手にして、場面を作っていました。練習を繰り返すなかで少しずつ言い回しが変わり、言葉が足されて、より自然な語り口になっていきました。

※舞台にはモニカ、セサルと姉、キケの聞き書きを読む二人がいる

【モニカ】

今から約 30 年前の 1988 年、生まれ育ったペルーから遠く離れた日本という国に仕事を求めやってきた。地元の日系の人々がとっている新聞に、日本にはたくさんの仕事があると目にしたのがきっかけ。今でも、ご飯を食べている時には故郷のペルーを思い出す。故郷を懐かしく思う時もあるけれど、日本の生活の中でも数え切れないほどの思い出があるなあ。

※次のモニカの来日場面は歩きながら読む

日系人向けの研修のビザが取れるようになって、日本へ団体で行く人たちもいましたけれど、私は一人で来たんです。一人で日本にやってきて、だから家族には心配されました。沖縄の伯父を頼って、はじめて来た日本は沖縄でした。そこでスペイン語が通じなかったので、日本語はそこで身に付けました。沖縄はいいところでしたよ。私は沖縄が好きです。

【セサルと姉の会話】

セサル：（電話がかかってくる）もしもし。

姉：もしもし、セサル？

セサル：ああ姉ちゃん、久しぶり。どうしたの？

姉：最近どう？

セサル：うん、やっとな建築の仕事も滑り出したかなという感じ。なに？お金？

姉：違うの、お金じゃなくて。2 週間後にね、日本に行く団体があるみたいなの。弟も行くし、セサルも一緒に行かない？

セサル：…はあ？？2 週間後？いやいや、だって今仕事が滑り出したって言ったじゃん。無理だよ、そんなの…。

姉：えー、でも es tu sueño（日本に行くのはあなたの夢じゃない）！

セサル：Si, es mi sueño, ha sido mi sueño. そうだけど、ずっと夢だったけど、でもそんなすぐに決められるものじゃないよ…。

姉：分かった。じゃ、決めたらまた連絡して。切るね、バイバイ。

セサル：うん、気を付けて。（電話が切れる）ハア（大きなため息）。2 週間！…でも夢なんだよね…。フウ（ため息）。…よし！

【キケの自問自答】

キケ：ハア（大きなため息）。

心の声：どうしたの、キケ？元気ないね？

キケ：いや〜、ほんととはさ、periodismo とか fotoperiodismo についてパリカプリセロナで学びたいのだけど、お金なくて。

心の声：じゃあ、日本は？

キケ：なんで日本？

心の声：だってキケのルーツじゃん！

キケ：そっか。まあ、たしかに日本は僕のルーツでもあるし…。行ってみようかな？お金貯めに。

心の声：そうだよ、夢は叶えなくっちゃ！

キケ：そうだよね。よし、日本に行く！

※全員舞台へ出る

1980年代、まだペルーに住んでいた3人の方のお話です。

それぞれ理由があって日本にやってきました。

1980年代のペルーは、経済危機と治安の悪化がひどかったそうです。

宮城モニカさんは、1988年に来日しました。

池田セサルさんは、1989年に来日しました。

キケこと佐伯エンリケさんも1989年に来日しました。

彼らは日系人として、日本に30年住んでいます。

※セサルの聞き書きを読む二人以外は、脇にはける

【セサル】

日本に来て行った最初の仕事は、日産自動車会社でのパネルづくりであった。パネルの骨組みをつくり、一からきれいに作業することが求められた。

一番簡単なのは穴を塞ぐことだったんだが、逆にこれ（布張り）が一番難しい。なんてたって上張りをセットするのが大変。皺ひとつあっちゃダメになっちゃうからね。ダメにしたいなんて思いながらやる人なんていないもんなんだけど、それでもなかなか思うようにいかないもんだから、うまく行きますようにって祈りながら貼り付けるのを見守ってたもんだよ。

次に就いた職場は、Japan Cheese Centerであった。ここで私はたった一人の外国人労働者として働いた。日本語はわからないし、通訳できる人もいない。やる仕事は簡単だったから、教えてくれる人のやるのを見てればできていたけど。日本語も、だんだんだんだん毎日の仕事に使う日本語は覚えていったよ。

<職場の終業時刻>

（終業時を知らせるブザーが鳴る）

※セサルが冷蔵庫を開け「セサル」と名前を書いて出て行く

※イラン人が帰ってきて冷蔵庫の中の物を勝手に使って自分の食事を作り、一人で食べ始める

※他の人たちも帰ってきて、「お疲れ～」と言い合いながら乾杯し、食事を始める。イラン人に「一緒にどう？」と話しかけるが、イラン人は言葉が分からず輪に加わらない

※食事をしていた人たちも、イラン人も食器も洗わずに出ていってしまう

※セサルが帰ってきて、汚れた食器を見て溜息をつく。冷蔵庫に入れておいた自分のものを探すがなくなっているのを見て“!No hay!”（ない!）と叫ぶ
※セサルがみんなの食器を洗う

（洗ってる途中から）寮も月 1 万だったのが、いろんな国籍の外国人向けの共同ハウスに住むようになったのさ。イラン人もいたよ。小さな部屋 4 つベッドがあるのに、一人当たり 45,000 円も払ったよ。言葉も違うし、日本語も話せない。辛うじて英語で話せたとしても、イラン人はそれすらも話さない。まともにコミュニケーションなんてできなかったよ。時々けんかもあるわけ、仕事から帰ってみれば。例えば共同のキッチンで使ったものを洗わなかったとか、自分の食材を勝手に使われた、とかね。私はケンカを見はしたけど、自分がすることはなかったよ。まだきれいなやつを使ったり、そうでなければ黙って洗ったりしてね。こんな感じだけど、面白い。みんな全然違う考え方で。ストレスには感じなかったね。

【キケ】

※キケが舞台中央に出る

日本にきてからはずっと自動車部品の工場で働いています。当時は差別があつたりして、なんというか…、嫌だと思ふこともあった。今はそんなことはないけど、もしかしたら（差別を受けていると）感じている人もいるかもしれない。

部品工場ですべて働いてはいるんだけど、やっぱり Fotografia とか Fotoperiodismo について勉強したいって気持ちがあつて、2000 年にパナマの大学の Periodismo コースを受けていたんだ。その時は茨城にいながらオンラインでコースを受けていたんだけど、オンライン教材がまだ発達している時代でもなかったから、国際郵便で教材が送られてきたりもしていたよ。そして 2008 年にスペインで一年間デジタルジャーナリズムを学んで日本に帰ってきたんだ。

【モニカ】

<モニカの職場>

※モニカの会社の上司の日本人が舞台に出てきてパソコンを打ち始める

※キケは脇にはける

モニカ: (ドアをノック)

日本人: はい。

モニカ: (部屋に入る)

日本人: あれ、モニカさんどうしたの？

モニカ: ちょっと相談したいことがあつて…。

日本人: (パソコンの画面から目を離さずに) はいはい、なにになに？

モニカ: 有休をもらって 25 日間故郷のペルーに帰りたいんですけど…。

日本人: 25 日！？25 日も有休を取って仕事はどうするの？

モニカ: 仕事はお休みをもらって…

日本人: (モニカの言葉を遮るように) いやいやいや困るよ！君がいない間の仕事はどうするの？

モニカ：…。でも…有休があることを教えてくれなかったじゃないですか。

日本人：いや、そんなの知らない方が悪いし。…じゃあ、分かった。いいよ、ペルーに 25 日行っても良いけど、日本に戻ってきた時にはあなたの仕事は残っていないから。

モニカ：でも…。

日本人：ほら、早く帰った帰った！仕事して、仕事。時間をもったいない！

モニカ：…はい…。

<労働組合の事務所>

※モニカと相談員がお辞儀をし合い、席に着く

モニカ：職場で上司に 25 日間有休をもらって故郷のペルーに帰りたいと相談したら許してもらえなくて…。もし行っても、日本に帰ってきた時には仕事はなくなっているって言われました。どうしたらいいんですかね…？

相談員：日本に帰ってきたら仕事がなくなっているなんて絶対におかしいし、それは労働契約違反だから、もし日本に帰ってきたときに本当に仕事がなかったら私たち労働組合に言ってください。私たち労働組合と一緒に戦いましょう！（手を握り合う）

<労働組合のデモ>

※全員が声を揃えてデモ行進

¡El pueblo unido jamás será vencido! (団結した人民は決して敗れない)

¡El pueblo unido jamás será vencido!

¡El pueblo unido jamás será vencido!

※デモ行進のストップモーション

※モニカがデモ隊の前に出てくる

労働組合の神奈川シティユニオンに入り、私たち日系人労働者の権利を求めて戦う決意をした。時には川崎駅で一日中デモに参加することもあった。努力の甲斐あってか、23 年間働いた自動車工場から退職金として 200 万円くらいのお金を受け取ることができた。そのお金は全て私が受け取るわけではなく、そのうちの何割かは労働組合に払い、今後の活動の資金に使ってもらうことになってる。自分が権利を獲得したらそれで終わりではない。私の権利のために戦ってくれた労働組合の他の仲間のために今度は戦わないといけいないの。

(全員で) 自分のためじゃない、みんなのため

だからね。

【キケ】

<東日本大震災発生>

ナレーション：2011年3月11日

人の声：地震だー！

※全員慌てる。イスの下に隠れたりする。違う情報が流れ、葛藤するキケ

KANTŌ というオンラインニュースの雑誌を作ろうと思ったきっかけは、2011年の大震災の時なんだ。ずっと働いている部品工場で、有休消化しなきゃならなくて、40日間休んだんだ。この時に、日本の新聞記者でスペイン語が話せる知り合いができて、彼に震災に関する本当の情報を教えてもらえるまで、正しい情報を知らなくてさ。ほら、日本政府が色々嘘を言ってたでしょ。私たちのコミュニティは混乱していたと思う。それまでにも、Mercado Latino とかには記事を書いたりもしていたんだけど、この時に情報の重要性を知ったんだ。だから、2012年に20人くらいの仲間と一緒に KANTŌ を作りました。Revista de artes なんだけど、3ヶ月に1回、文化について書いて発行しているよ。色々な文化を融合させたくて。今後はこれをもっと成長させられればと思っています。

【モニカ】

<モニカの現在>

※モニカの知人がモニカに声を掛ける

知人：モニカは工場を辞めて今は何をしているの？

※モニカが前に出てきて、他は脇にはける

自動車工場ではひたすら部品と向き合う毎日だったけれど、介護の仕事は人と人の関わりがとっても大事。人との触れ合いを感じることができるこの介護の仕事は、昔の工場で働くことに比べてとても気に入っているのよ。自分の権利を求めてあの時に戦ったことは間違っていなかったんだなと感じているわ。今もこれからも私は日本で生きていく。

※各自が演じた役の印象に残った台詞を言いながら全員舞台中央に集まる

（「日本に来ることが小さいころからの夢」「自分のためじゃない、みんなのため」「冷蔵庫の食べ物を誰かが食べた」「KANTŌ を多くの人に読んでもらいたいな」など）

セサル：Así, somos nosotros.

全員：これが、私たち。

※全員正面を向いて一礼

発表会写真と観客からのコメント

作品のクオリティの高さに驚いています。
発表の機会がこれだけで終わってしまうのはもったいないくらい素晴らしいパフォーマンスでした。



インプットして聞いたものをアウトプットとして体で表現するのは面白い試みです。
パフォーマンスで見せる、まさに体に一回取り込む形がとても面白いと思いました。

これから海外から労働者の方がどんどん日本にやってきて、この作品のような話が普通になるのではないかと感じました。



日系ペルー人の友達は、みなさん高学歴なのですが日本では工場勤務です。日本に来るとそういう仕事しかないというのは私もとても残念に思っていました。そういうことを知らない人が多いと思うので、この作品をもっと違った場所で発表してもらえたらいいと思いました。

インタビューの通訳をしました。
劇となって観ると実際にお話を聴いていた時と印象が違い、具体的なイメージとして自分の中に姿が浮かんできました。



この作品は最初から台本があった訳ではなくてインタビューをして作ったと聞いていたので、私もインタビューに参加したいと思いました。

日本に来ている外国人労働者が有休があることを知らないという現状は今でもあると思うので、こういう形で広めてもっといい社会にしたいと思いました。

ワークショップに参加した感想

この企画に参加した理由、ワークショップを通じてどんな発見があったか、面白いと感じたこと、企画の改善点など

さとばち

留学から帰ってきて全く聞かなくなってしまったペルーのスペイン語を聞ける、ペルーの方と交流ができると聞いたのが参加を決めた一番の理由でした。しかしその交流で聞いた事実は、私がしていた想像を遥かに超えた重さで、日本社会の根深い問題を映し出していた衝撃的なものでした。おもてなし日本、そして外国人労働者の更なる受け入れ政策で来日数が増加している中、人権や考え得るトラブルへの対処法など受け入れ態勢が整っていないままにこの路線を突き進む日本社会に危機感を感じさせられました。

演じるのは幼稚園以来である私には最初照れがありました。アイデアに対して「そんなことするのは恥ずかしい」なんて一言もなく、学生も講師の方もまっすぐに反応を返してくれたことで気兼ねなく提案できました。これは本当に人に恵まれたと思います。

また、言葉じゃ臨場感をもって伝えられない圧迫感や緊張感、感情を伝えられるのは体を動かすこの表現方法ならではの感じさせられました。特にモニカさんの、有休申請して突っばねられるシーンは今思い出しても胃が痛くなるほどですが、言葉だけ聞いていたのではここまでの重さはなかったと思います。再構築して初めて伝えることができるだけでなく、自らも知ることができるのだと、このワークショップを通して気づきました。

改善点としては、1.インタビュー時の年表作成の際、模造紙は別に要らなかった（ノートで十分）気がする、2.ビデオで自分たちの演技をチェックする機会をもう少し増やしてほしい、3.（可能ならば）留学生にも声をかけて参加してもらえたら、また新しい視点が得られるのでは？の3点です。

なつみん

授業で勉強している移民という話題について、椅子に座ってただ聞いているだけではなく、実際に自分の目で見たいと思ったことが今回私がワークショップに参加しようと思ったきっかけでした。日系ペルー人の方にインタビューをし、それをもとに物語を書きおこし演じるというのは、私にとってどれも初めてのことでしたが、学びの多い経験となりました。私は、お話を聞いた日系ペルー人の方と、日系ペルーの方に有給休暇を取らせようとしめない工場の上司役を演じました。移民について勉強し、法律の改正や制度改革など、紙の上で学んできてはいましたが、それらがそのまま移民取扱いの改変の一つ一つが自分の身の上に降りかかってくるという体験は、私にとっては衝撃でした。また、上司役を演じた際、「どうして私（上司）は頑なに、日系ペルー人に有給休暇という当然の権利を与えようとしないのだろう」という日本人経営者に、日系ペルー人への人権侵害をさせている日本社会側への違和感も覚えました。その人の身になって考える、というのはよく言われることですが、五感や身体の動きの隅々

までその人になりきろうとしてみた結果、自分の目からではない目から新たに社会を見つめることができました。

今回のワークショップでは、学部や学年、経験に共通点のない学生の方々と一つの作品を一緒に作り上げ、それが刺激のある環境を作り出していたと思います。多文化共生に興味のある人、ペルーに留学経験のある人、メディアに興味のある人、様々な考えを持った人が自分の経験や考え、知識をもとに同じ話題について口々に意見を言い合いました。そのことが私の視野の狭さを気づかせ、より広げられる良い機会になったと思います。

マイナスイメージの抱かれることの多い移民ですが、移民の方々も自分の権利を獲得し、楽しい人生を送ろうとしていること、また、辛いことがあっても自分の人生に満足していると笑顔で語っているところを見られたことが、私が今回参加して一番良かった、と思ったところです。こういった企画に参加する機会を得られたこと、そして、お世話になった一緒に活動した学生や先生方には感謝の思いで一杯です。

なおばか

参加した理由：主に3つある。1点目は、4年生になり、卒業を目前とする時期に、今までやったことのない事に挑戦しようと思っていたからだ。上智大学での学びには非常に満足していたが、少人数で何か1つのモノを作り上げた経験が今までそれほど無かった。

2点目は、「日本に住む外国人」というテーマが、自分の学びの関心と重なったからだ。私は普段ジャーナリズムを専攻している。「メディアにおける外国人労働者の表象」を卒論のテーマに選んでいる。メディアでは、「外国人労働者」と一括りにして語られる事が多いが、一人一人に特有の顔があり、感情があり、人生があるはずだ。メディアが逃している人々の多様なライフストーリーに触れて、何か卒論のヒントが得られればと思った。

その中でも、「日系ペルー人」に惹かれた点が3つ目の理由にあたる。1年次にLAPのペルースタディーツアーに参加し、現地で日系ペルー人との交流をはかった。ペルーに住む日系ペルー人の人々に触れた。今回は、日本に住む日系ペルー人の方々にも会ってみたいと思うようになった。

感想：私自身、「外国人が日本の社会で住みやすいために、メディアには何ができるのか」を問題意識に大学で4年間学んできた。ニュースやドキュメンタリーを見て、人々はそれ

らの事柄を自分毎にできるのだろうか、そのためにはどうしたら良いかを模索していた。LAPのスタディーツアーに参加した際に受けた大学の授業で、社会学の教授は「denying Japanese-Peruvian is denying our history」とおっしゃっていた。世界では心理的、物理的に人々の間で壁が生まれている。そういった状況の中で、他者を受け入れる「寛容性」が人々に欠けていることを気付かされた発言だった。では、その寛容性はどのように養ったら良いのだろうか。相手を理解することは口では簡単に言えるが容易ではない。そういった意味で、「自分が擬似的に相手になる」経験を与えてくれるお芝居の有効性を感じた。また、今回は7人という小規模な参加人数であったが、それぞれが同じ方向に問題意識が向けられていることを嬉しく感じた。年次も学部も異なるが、同じように問題意識を持ち、各々が考えている意見に触れられた。

企画の改善点：素晴らしい企画であるのに、参加人数や演劇を観に来た人が少なく、少し残念に思った。しかし、少人数だからこそあのような主体的に参加する姿勢が生まれ、観客もオープンに意見を述べる場が生まれたのだと思う。せっかくなら、キケさんやモニカさんにも演劇を観ていただき、感想を聞きたかった。



ゆうり

私は静岡県の工場の多い地域で育ち、小学校ではクラスに多くの日系人、外国人労働者の子供たちがいた。静岡にいたころの私は、外国といえば、クラスにいる外国籍の子たちのイメージを持っていた。どちらかといえば、「国際交流」というような楽しい響きのあるようなことはなされていなかった。しかし、上智大学に入って国際政治や移民について学ぶうちに、もっと自分が「日本の中の外国」に目を向け、向き合いたいと思い始めた。地元では少なからず、外国人に対しての偏見がある。しかし、上智という国際的に寛容でオープンな学びの場で、外国人労働者の問題に取り組んでみたかったのだ。それが、来年から就職する地方公務員になる際に何らかの役に立つとも思った。そして単純に身体を使ったワークショップということにも興味を持った。

ワークショップは率直にとても楽しかった。先生たちとゲームをしたり、ストップモーションを一緒に考える時間は本当に楽しかった。字ではなく、講義ではなく、身体を使って

表現することがこれほど、楽しく、自分の中にもストーンと役が入ってきて、相手の中にも自然と伝わるものだとは思わなかった。自分が「モニカさん」を演じることは一生で初めてで一生で最後だろう。日系人の役になり、演じ、日系人について純粋に考えたことのある人は日本に何人いるのだろうか。メディアや講義では伝わってこない感覚があった。役を演じることが「相手の身になってみること」だと思った。

有給休暇をしらなかったことや労働組合に入るシーン、母国で大学の教授をしていた方が日本の工場に勤務して数倍のお給料をもらったこと、これらを知った時はとても驚いた。地元でともに生活していた日系人の方々も経験したのか、それを知らずに十数年も過ごしてきたと思うとぞっとした。外国からきて、日本語に不自由があるとそれだけで、日本の社会では搾取されやすいのかと、残念に思った。この経験を忘れずに、問題に関心を持ち続け、様々な表現方法で伝え、取り組んでいきたいと思った。

りかこ

大学1年～2年まで日本語・教科支援ボランティア活動に参加していた。ここで初めて南米出身の日系人の方々に出会い、親交を深めていった。大学3年になる直前の春休みに、大学の短期研修プログラムを利用して実際にペルー現地にある日系社会へ足を運ぶ機会もあったため、南米日系人の中でも特に日系ペルー人のルーツには非常に興味があった。そのため、今回このイベントのフライヤーを見た時、「これをやらなければ大学生活を終われない」と思い、参加するに至った。普段ならインタビューをした後は、文章におこしてまとめるだけであるが、それを「身体を使って表現する」ことはこのような機会がない限りなかなか体験できないだろう。これも参加に至った理由だ。

ワークショップを通して思ったことは、実際に演じた方がより当事者の置かれていた状況やその時の思いをより深く分析でき、自分の記憶の中に残しておけるということだ。深く分析しないと当事者を演じることもできないし、構成も考え

ることができない。よく身体を動かしながら英単語を覚えると思えやすい、なんてメディアで言われていたりするが、インタビューもそうだと感じた。

また、観客の方々と一緒にその場で意見をシェアできるという空間も普段インタビューをして書きおこすだけでは体験できないことであるため興味深かった。文章を、しかもインタビューを文字起こしすることは非常に孤独な作業だ。誰かにそれを見せたところでフィードバックがすぐに返ってくるわけでもない。そのため、すぐに制作サイドと観客が意見を交換できる空間があることには喜びを感じた。

企画内容自体には大変満足しているが、もう少し準備期間を長くすべきだと思う。特にインタビューはもう少し長い時間をかけてやってみたかった。より準備期間が長くなれば、より演者自身がそのテーマについて考えられる機会も増えると思う。

しおり

このワークショップに参加した理由は「演劇」を通してペルー人物語を表現するところに魅力を感じたからです。私自身、演劇を通して英語などの語学を学んできた経験あり演劇を通じた言語習得や異文化理解に非常に興味があったので、今回のワークショップに参加することを決めました。

ワークショップはどの回もとても楽しく充実した時間を過ごせたことにとても満足しています。今までペルー人との交流が全くなかった私にとって、少しチャレンジな内容ではありましたが、実際に彼らを演じることで日系ペルー人の存在がぐっと身近に感じられるようになりました。インタビューに行った時は慣れないスペイン語と初めて会うペルー人だったこともあり、少し戸惑ったりもしましたが、三人ともとても気さくで沢山自分自身について話してくださり助かりました。インタビューが思っていた以上にスペイン語を中心に回っていたため、最初に全体で話を伺った時間は通訳の方がいましたが、少し話の展開についていくのに大変でした。あの短時間で彼らの人生を全部話してもらうのは不可能だと思うので、日本に来る前の話、日本での仕事、などもう少し話のテーマを区切って全体でのインタビューを進めていけたらもっと多くのことを吸収することができると思いました。

グループごとのインタビューでは、モニカさんは労働組合、キケさんはメディア、セサルさんは仕事のことなど三人ともそれぞれ話していることの焦点が少しずつ違って面白かったです。三人とも日本に住むペルー人という共通点があるけれど、それぞれのストーリーがあるのだなと思いました。私はモニカさんにお話を伺ったのですが、当時の日本での労働環境のことや有休のことなど初めて知って驚くこともたくさんありました。実際にお話をお伺いすることができて、本当に貴重な経験でした。

また、ワークショップを通して演劇のすごさを改めて感じることができました。モニカさんを演じる中で、この時どういう気持ちだったのだろうか、モニカさんだったらどうするだろうなど相手の立場になって考えることでインタビューの時よりもモニカさんの存在がとて身近なものへと変わりました。一緒にワークショップを行ったメンバーたちとも、劇を作っていく中でコミュニケーションがとれ一回目よりも距離が縮まったと思います。演劇を通して、他者とのコミュニケーションだけでなく異文化理解も深めることができました。このワークショップに参加できて本当に良かったです。ありがとうございました。

ゆい

この企画に参加した理由は、日本に住む難民に興味を持っていて、違う考え方を持つ人々がどのように共存できるかという疑問を考えるためでした。また、劇を通して、人前で話すことに慣れることを一つの目標にしていました。

この企画を通して、演技は相手の気持ちを理解するための近道だと感じました。設定の状況や、役の感情を十分に理解していないと、演技や朗読が不自然になってしまうことに気づきました。役の方の感情に近づけるように、自分の経験との共通点を見つけることから始め、想像をしました。演技を通して自分がその人になったかのように感じるので、近い立

場から物事を考えることができると思いました。実際にインタビューするだけでも、日本の外国人労働者の問題は身近に感じましたが、演技した後は別の感覚でした。聞いた話や情報が自分の一部になっていました。このワークショップを通して、難民に限らず、日本の外国人労働者の受け入れ体制について興味を持ちました。外国人労働者が自分の能力を生かした仕事を日本でできる環境をつくりたいと思いました。ワークショップに参加しとても学ぶことが多く、貴重な体験ができました。企画の改善として、インタビューの内容を事前に参加者みんなで決める機会があると良いと思いました。

身体アートの力

企画・制作・記録 藤浪 京

日本のペルー人物語』“Así somos nosotros”は日本在住の日系ペルー人の池田セサルさん、佐伯キケさん、宮城モニカさんへのインタビュー内容を各自が書き起こした「聞き書き」を基に創り上げられました。同じ話を聞いても、どう聞いたか・感じたか、どの箇所が強調されて心に残ったのかはそれぞれ違います。「聞き書き」をすることにより、聞き手の中でセサルさん、キケさん、モニカさんの半生／物語が再構成されたのです。そこから更に各自が取り上げたい場面を抜粋し、繋ぎ合わせることで3名のこれまでの歩みが再々構成され、インタビューで話を聞いた時よりもずっと現実感があり、物語性のある生き様が浮かび上がりました。物語性のある生き様という意味は決して事実を脚色したり誇張したりしたものではなく、聞き手にとって他人事であったことに思いや考えを至らせることができるようになることであり、社会の中で属性によりカテゴライズされた人々にはそれぞれ顔があり、個々の在り様があることを知るということです。これを可能とするのは演劇であり、これこそが演劇の持つ本質的な力だと思えます。

2016年にグローバル・コンサーン研究所の職員として担当したビオレタ・ルナさんのNK603: *Action for Performer & e-Maíz* 公演時の忘れられない光景があります。上演後にビオレタさんとの質疑応答や意見交換をしていた時の学生さんたちの表情です。今まで見たこともないパフォーマンスに圧倒され、衝撃を受け、戸惑いながらも強い関心を示したキラキラ（ギラギラ?）した目をしていました。イベントの最後にお決まりのように司会者が言う「意見のある方どうぞ」の台詞が事実上のお開きの合図にあることはなく、学生さんたちが次から次へ自ら手を挙げてビオレタさんに感想を述べている姿も印象的でした。NK603～は遺伝子組換トウモロコシをテーマとした作品です。授業や新聞、テレビ、インターネットで見聞きする社会課題は、自分事として捉えて実生活の中でどう行動していくかということになかなか結びつきにく

いと思いますが、「ビオレタさんのパフォーマンスを見なかったら遺伝子組換食品について考えることはなかった」「今までの学生生活の中で一番印象に残った」といった声を聞きました。アートは人の感性に訴えかけます。感性が刺激されると思考が深められます。さらに、特に身体アートの場合は演者と観客、舞台と客席という境目もなくなり、同じ空間の中に存在する者としてその課題を共有することができます。NK603～を上演した時はまさにそのような空間をあつめた全員が創り上げていました。身体アートの力を強く実感した瞬間でした。

今回のワークショップは学生さんにプロのアーティストの公演を観てもらうのではなく、自らが作り手そして演者となり、より踏み込んだ形態で社会課題を考えてもらうことを目的に企画しました。書籍、論文、インターネット情報などでの学びは机上のみのものとなってしまう、自らと社会及びその社会課題との接点が希薄になりがちです。自らと異なる共同体に足を運び、人々の生の声に直接耳を傾けて思いを寄せ、相手の立場に立って自分事として捉えるというのは簡単なことではありません。ですが、自分とは異なる人物を演じることと、その演劇を作り上げるプロセスはそれを手助けする有効な手段であると考えます。今回参加された学生の皆さんは企画の趣旨をしっかりと汲み取り、高い目的意識を持って臨んでいました。インタビューと発表会も含めて全5回というタイトな日程のワークショップでしたが、皆さんの集中力の高さと感度の鋭さに感銘を受けました。また、思いや考えを的確かつ明確に言葉に表している姿に頼もしさと期待を感じました。完成した“Así somos nosotros”は、文字通りの集団創作で全員が対等に力を出し合っ創り上げた非常に素晴らしい作品となりました。改めて心からの拍手を送ります。

そして最後となりましたが、的確なアドバイスで学生さんたちの力を最大限引き出して下さったコーディネーターのすずきこーた先生にも心から感謝申し上げます。

上智大学外国語学部イスパニア語学科卒業。一般企業、国際NGOでの勤務を経て2015～2016年度、グローバル・コンサーン研究所の臨時職員としてシンポジウム、講演会、フィールドワーク、パフォーマンス公演などの企画の運営に携わる。2017年度グローバル・コンサーン研究所主催『Rosa Cuchillo～ナイフのロサ』公演の企画・制作に参加。

■ワークショップ参加学生

文学部新聞学科 4年

文学部新聞学科 4年

外国語学部イスパニア語学科 4年

法学部国際関係法学科 4年

総合グローバル学部総合グローバル学科 2年

外国語学部英語学科 1年

国際教養学部国際教養学科 1年

西崎 奈央 (なおぽか)

吉田 梨花子 (りかこ)

佐藤 なつき (さとばち)

杉浦 優里 (ゆうり)

佐藤 なつみ (なつみん)

関山 史織 (しおり)

松島 唯 (ゆい)

■インタビュー通訳学生

外国語学部イスパニア語学科 4年

外国語学部イスパニア語学科 1年

押田 麻里菜

米尾 美咲

『日本のペルー人物語を創ってみる』ワークショップ

進行：すずき こーた

企画・制作：吉川 恵美子 藤浪 京

主催：上智大学グローバル・コンサーン研究所

協力：蒲田教会

ワークショップ報告書

発行者：上智大学グローバル・コンサーン研究所

発行日：2019年3月5日

編集：藤浪 京